

創世ホール通信No. 300

催し案内 + 文化ジャーナル
2020年1月1日発行 ■北島町立図書館・創世ホール
電話：088-698-1100 ファクシミリ：088-698-1180
〒771-0207 徳島県板野郡北島町新喜来字南古田91



創世ホール名画鑑賞会 vol. 31 『モリのいる場所』

1月18日(土) ①午前10時30分 ②午後2時(2回上映)

「もっと生きる、
もっと描く。」
—画家・モリ(94歳)

「ああ、そうですか。」
—妻・秀子(76歳)

会場：3階 多目的ホール
上映作品：「モリのいる場所」(2017年)
出演：山崎努・樹木希林 ほか
監督・脚本：沖田修一
入場料：一般・大学生

前売1,000円 (当日1,300円)
小中高生・シニア(60歳以上)
1,000円(前売・当日共通)

主催：創世ホール名画鑑賞会実行委員会
(☎088-698-1100)

■31回目となる今回は、日本映画界を代表する名優・山崎努と樹木希林の共演作「モリのいる場所」を上映します。■時流に無頓着で、庭に集い来るちいさな生き物たちを描き続ける画家・モリ(山崎努)と、彼を支え続ける妻・秀子(樹木希林)の、何でもない、けれどちょっとおかしい一日が始まる——■庭と生き物たちを愛する老夫婦と、二人に惹かれて入り浸る写真家さんや画商さん、近所の人たちに囲まれて、モリの家は今日も賑やか。ところがある日、周辺でマンション建設の話が持ち上がる。日が差さなくなれば庭の生き物たちは生きていけない。小さな生命たちを守るため、二人がとった行動とは! ? ■「画壇の仙人」と呼ばれた画家・熊谷守一のエピソードを元に紡がれる、心あたたまる夫婦愛の物語。ご期待下さい。



人形劇団べんべろべえ公演

2月6日(木) 午前11時

会場：2階 ハイビジョンシアター 入場無料

対象：就学前の子ども 赤ちゃんも大歓迎

演目：「チーズがたべたい、ねずみくん」 ほか

問合せ：人形劇団べんべろべえ

(代表：兵頭 ☎088-698-6652)

速報★創世ホール文化講演会 南伸宏(南伸坊)講演会

3月22日(日) 午後2時30分

会場：3階 多目的ホール 入場無料

講師：南伸宏/南伸坊

(みなみのぶひろ/みなみしんぼう)

(イラストレーター・装丁デザイナー

・エッセイスト)

演題：「南伸坊が語る私のイラストレーション史」

主催：北島町立図書館(☎088-698-1100)

■漫画・ロック・特撮・SF・幻想文学…現代に至るまでのサブカルチャーについて、当館は過去に様々なテーマで講演会を開催してきた。■今回はイラストレーター、装丁デザイナー、エッセイストとして多方面で活躍されている南伸宏(南伸坊)氏をお招きし、戦後日本のイラストレーション史を俯瞰した講演をしていただく。■南氏が深く敬愛する和田誠氏、師匠の赤瀬川原平氏、長年編集に携わり無二の個性を持つ作家を多く輩出した『月刊漫画ガロ』など、60年代~80年代の活気と熱気の渦巻く文化・芸術シーンのなかで綺羅星の如く輝く表現者たちの人と作品について語っていただく。■講師先生のご意向により、創世ホール元館長・小西昌幸氏が聞き役となり、対話形式で行います。皆様、多数ご参集ください。

文◎化◎ジ◎ャ◎ー◎ナ◎ル

だれが明朝体を作ったのか

～その誕生と歴史⑥

書体設計家 活字書体史研究家★小宮山博史
講演採録★2019年3月16日★北島町立図書館・創世ホール3階多目的ホール

■(図版)これは、4号(活字)の見本帳。この図版の中の4号活字がオランダに渡った。オランダに渡ることについては、日本語学者ホフマンが関わっています。ホフマンは、長崎出島の医師であったシーボルトの弟子です。

■(図版)これは香港英華書院から導入した4号活字の校正刷りです。ここのところをちょっと見せてください。部首の一番最後は《216》になつてますけど、『康熙字典(こうきじてん)』の部首では《214》ですから、間違ってますよね。

■(図版)これが校正を終わった正式な見本帳の表紙です。ピロート装の、なかなか立派なものです。活字と母型の見本となっています。ここのところを覚えておいていただきたいんですけど、ここに記号と数字があります。《K1 13》とあります。後で写真が出てきます。こうやって漢字活字を分類しています。

■ヨーロッパ人の学者は漢字が読めますからすぐ分かるんですけど、活字を拾って組版をする職人は、漢字が読めません。どのようにしてそれに対応するかが問題でした。そこで活字の胴部分にナンバーを打っておいた。

■(活字を二つ並べた写真)上にある活字のナンバーが、《118-12》。118というのは、『康熙字典』の部首でいうと、竹冠(たけかんむり)。12というのは、部首を除いた画数(かくすう)。下の画像を見せてください。これが《115-5》。ノギヘンの部首の番号が115、右側のつくりの画数が5画ということで表わされています。

■(活字写真)どういう字がこれにあたるのかというと、上の文字は【審】。竹冠に、下は橋の字の右の部分の喬。もう一つの文字はノギヘンに必で【秘】。

■この活字を使う必要があるとき、職人がそのナンバーに基づいて活字を拾ってゆくという非常によく出来たシステム。つまり漢字が読めない人に対して、どのようにして正確な漢字を拾われるか考えたことが分かると思います。

■フランスの話をしきしましたが、フランスの場合も同じようなことをしてるんですね。活字のおなかに、4桁とか5桁のナンバーを打ち込んでるんですね。その数字を見本帳に記載することで、漢字活字が読めない人たちにどう拾わすかということが凄く重要であったということがよく分かると思います。

■(風景写真)いよいよ、最後のパートに入ります。これは長崎の出島です。この画面に見える家の向こう側に1本の橋がある。画面の左側を見せてください。ここに水門があって、ここから荷物を搬入搬出した。このあたりにオランダの通詞(通訳)がいた。これは1864年に写真家のアレックス・ベアトが撮影したものです。オランダ語の通訳の中に本木昌造という人がいた。本木昌造は、外国の本を見ていて、日本でもこのような綺麗な印刷ができないか、という

ことでずいぶん苦労した。そこで上海の美華書館のギャンブルという技師を招聘します。

■(図版)これが日本の今の明朝体活字の基本になった5号という大きさで、3.7ミリ四方の大きさです。非常によく出来たもので、日本の基本的な本文用の活字はこの5号というサイズで作られています。今までにできた漢字活字の中で最高峰の出来だと思えます。

■(図版)この『和英語林集成』というヘボンさんの本もこの活字を使っています。少し先に飛ばしてゆきます。岸田吟香(きしだ・ぎんこう)という今の「毎日新聞」(当時の「東京日々新聞」)の記者で後に有名になる人がいるんですけど、ヘボンさんと一緒に上海に行ってこの本の校正を手伝った。

■(図版)画面を右に動かして拡大してください。今の僕たちが見ると当たり前なんですが、英語ヨコ組み、日本語ヨコ組みの辞書としてはこれが最初です。それまでは英語ヨコ組み、日本語タテ組みっていうのが、基本の作り方でしたけど、ヘボンさんの辞書以降は、基本的には英語・日本語全部ヨコ組みという風になってきます。今の僕たちが見ている辞書は、みんなヨコ組みです。ヘボンさんは、別にそんな風に意識せずに自分の原稿がヨコ書きだったからこうなったんでしょうけど。カタカナも作っている。

■(図版)はい、もう一度戻ります。ここに5号活字があります。この中で現在の日本の明朝体活字に大きな影響を与えたのは、この2号とそれからこの5号、この2つです。これはアメリカ人のギャンブルという人が作ったもので、これが基本になって今の明朝体が生まれてきています。なかなか今と遜色がない出来です。

■(人物が多数写った写真)これは、アメリカ議会図書館にあった写真ですけど、この人がギャンブルさん、この人がオランダ通詞の本木昌造さん、そしてこの丸顔の人が後に東京築地活版製造所の社長になった平野富二。17名の日本人がいますが、彼らがギャンブルから活版伝習を教わった人たちです。今までこの写真は、未発掘でありました。この写真の中の二人の日本人しか、名前は分かりません。どうも、この中に一人町人がいるようなんですけど、よく分かりません。

■(図版)次にそのギャンブルに習って本木昌造たちが作った見本帳がこれです。「崎陽新塾製造活字目録」。(※右に図版資料を掲載)

■これには明朝体という言葉はありません。まだ明朝体という言葉は一般的ではなかった。この初号というのは、本木たちが作った大きさ。ここに1号とあるのは、イギリス人サミュエル・ダイアが作った。もとは香港の印刷所所のもので、それからこの2号は、ギャンブル、アメリカ人が作った。3号、これはフランス人で、日本人が作った楷書と行書があります。4号はイギリス人、5号はアメリカ人、たぶんこの小さいのもアメリカ人が作った活字だと思うんですけど、これが日本における最初の活字見本で、ここから日本の明朝体は出発します。明治5年のことです。

■これを少しずつ手直しして作っていったというのが、日本の活字の歴史になります。この頃はさっきも言いましたが、全部、原寸手彫り。原寸の大きさと逆文字で彫っていく。この町立図書館1階にも原字を展示していただいておりますが、ああいう風に拡大して書かれるようになったのは、昭和23年以降です。今も、拡大したもので書いて、作っています。ですから活字の作り方というのは、原寸

の手彫りか、拡大した手書きか。この二つによって作られたということになる。今も、基本の文字は拡大手書きによって作っているわけです。そこからデジタルデータにしてPCで使えるようにしていきます。

■なんだか、バタバタしてまとまりのない内容になったかもしれませんが、一応、これが明朝体活字の歴史の中の67年の流れ、というものを、お話しさせていただきました。

■ヨーロッパで東洋学とキリスト教の布教のために作られたものが、どんどんどんどん東の方に向かっていく。そして上海で、その中の良いものが開発されて集積される。そしてそれが日本に渡って今に至る。日本の東側は太平洋ですから、行くことができない。そんな風に見てくると、日本人が作ったと言われるような明朝体、東アジアで使われている明朝体でさえ、実は世界史の動きの中で作られてきた、ということが分かってきます。そういうことが分かってきますと、世界というものが非常に身近なものになってくるように思われます。近代的な活字としての明朝体を作ったのは、実はヨーロッパ人やアメリカ人なんだ、それを日本が受け継いだというだけのことです。

■もしこのあたりのことに関して興味がおありなら、インターネットで僕の連載を読んでみてください。「小宮山博史 活字の玉手箱」か「ダイナコムウェア 活字の玉手箱」で検索してみてください。ダイナコムウェアという会社のサイトの中で読めるようになっています。今、20回目になっています。今日したようなお話を詳しく書いてあります。

■僕は、今日ここが最後の講演会だというつもりで来ました。今日は本当にありがとうございました。(完結★採録・文責=小西昌幸)

崎陽新塾製造活字目録	
天下泰平國家安全	初號 一字 承四十文
天下泰平國家安全	一號 一字 承十九文
天下泰平國家安全	二號 全 承十二文
天下泰平國家安全	三號 全 承八文五分
天下泰平國家安全	全 承八文
天下泰平國家安全	四號 全 承八文
天下泰平國家安全	五號 全 承七文五分
右同形平假名	七號 振假名 承五文